

# 『紀州・白浜温泉という国内植民地の再生産』

倉田昌紀

## はじめに

三人の各報告者の方たちの歴史の層を深く掘り起こしていく地道な研究姿勢に敬意を感じるとともに、北海道、沖縄諸島、小笠原諸島への強烈的な国内植民地化過程での搾取と差別についていかに私自身はその地方の具体的な歴史とその地域への公の政策に無知であったかを思い知った。特に近代の国内植民地化におけるそこに生活する人々を服従させていく過程での住民の辛苦と犠牲の大きさについて、また被害者と加害者とがはっきり分離できず、その土地で生きていかなければならなかった生活する同一人の心のなかに、両者が重なり抱き合って命を繋がないといけない歴史の苛酷な必然について思い知らされた。

私の「悪癖」で、「歴史科学」を資料にして「生活する心」（ベンヤミン）を想像してしまう。今後も続くこれらの地域の歴史に、「誰がこの地域のこれまでの苦しみに詫びればいいのか」と。直接手を下して生きていかなければならなかった生活する地域の人々の背後に、ぴったりはりついている真の下手人。「代償可能性」と同時にどんな「代償」も原理的に間に合わぬこと。もうこの世には生きていまい死者たちに、断罪されるべきもの、「詫び」ねばならぬもの名は分っている。私は歴史の形骸化と墮落から免れる基礎条件として、〈国家〉と〈資本〉に直面し、それとの関係を見てとることのほかないであろうと考える。その場で報告者の方々の歴史上の具体的な事例の説明の「声」を聴きながら、いまま国家と資本の手で押し殺されている逃れられない私たちの姿を透視しながら、考えさせられた。

明治以来の140年、国家を延命させ、国力を管理統制していくためには、様々な搾取と差別を通して、無惨にも支配する国内植民地を再生産させていかねばならない明確な必要性を、それぞれの三地域の報告から理解した。

もうすでに久しく日本には自立した「いなか」はなくなり、開発と流通の猛コマースリズムで植民地一色の風景になってしまったと見ることもできるだろう。きだみのる氏の『気違い部落周遊紀行』が出版されたのは1948年、『日本文化の根底に潜むもの』は1956年である。松竹で『気違い部落』が映画化されたのは1957年のことでもある。『にっぽん部落』[岩波新書・1967年刊]のあとがきに、仏語にはあるが、「外国語に直してみると事の真実にもっと接近できることが間々あり・・・。」と述懐し、終戦を降伏、進駐軍を占領軍。文化を文明人開化人、知識人の原語は「われ理解する」から出た言葉だ、と書かれている。きだ氏こと山田吉彦氏が亡くなられたのは1975年7月、80歳であった。「部落」の民のもつ、土竜のような（近代

的) 自我喪失の無意識の土俗的風習を意識して、心の深層に流れる無常観と、物のような自己保存の主我心に勝ちを認め、日本への「奉公」を止めて「わしらのクニにコミュニケーションを哲学した」過去への反思の「きだ・みる」は、もう過去の人になってしまったのだろうか。

## 白浜温泉について

私の住む地方のひとつの象徴に触れさせてもらおう。現在の和歌山県白浜町の介護保険料は、全国で三位、近畿地方で一位の高額の町である。老人施設で暮らしている方々の半数は、九州や四国の山間僻地、離島、県内の過疎地、大阪方面から働きに來られ、白浜で年齢を重ねて老人になった方たちである。たまには、町営の住宅で縊死されたり、アパートで一人暮らしのため、亡くなられて数日たって発見されるということもある。私には修羅の遠近を見る想いがする。

白浜温泉の開発が始まったのは、1919年頃からで、海路から陸路、鉄道への交通網の整備とともに、昭和天皇の行幸も1929年にあり、知名度を高めた。1960年には、年間の宿泊客数が100万人を突破する。東京オリンピック {1964年}、大阪万国博覧会 {1970年} と好景気が続き、旅館数も客の収容力も増加していく。

1955年頃から大阪や東京の外資を導入し、地元の芋畑などを中心にして土地が買収され、鉄筋の大ホテルが建ち並ぶ。それまでの半農半漁の暮らしが大きく変化していくのである。{資料の図表を参照}

1973年の石油危機まで、宿泊人数は増加し続ける。その後、観光客の旅行の形が慰安のための団体旅行から小グループ、家族連れへと変わり、一戸建ての企業の寮や保養所が最高時には115軒にもなっていく。列島改造ブームで宅地開発も大いに進められ、高層マンションも増えていく。漁師の話によると白浜は、沖の海からは真黄色に見えるそうだ。魚付き保安林も消えたのだ。

現在は、最高時には72軒あった旅館組合加入のホテル・旅館は25軒で、地元民の経営は4軒である。バブル崩壊後、企業の寮・保養所は殆ど閉鎖し空屋になってしまった。

2005年度は、宿泊人数も100万人を割り、1968年には13,700人あった客の収容力は、いまは8,528人である。地元経営者と外資の経営者の資本の搾取と抑圧には違いがあるのだろうか。宗主国と被植民地国の旧植民地主義のような関係から、地域の国内植民地にもグローバルな新植民地主義に移動していく過程で、様々な段階の植民地主義の層が複合し、時には国家と資本の欲望が纏れ、ずれをも生じながら、私たちの生活の表層や深層に影響し進行していっているように私には思われる。

2006年度は宿泊客数が2005年度より、10万6996人増え108万270人となった。旅館組合の理事長・S氏は「閉鎖していた宿泊施設が(外資によって)営業を再開したほか、既存施設もそれぞれの特徴を発揮して頑張った。誘客目的のイベントも定着したこともある。株価が上がっているので、今年は景気が少し上向くとみている。心一つにして白浜を盛り上げていきたい。」とより一層の「再生産」を目差し話してくれた。低価格(一泊二食付で7千円~9千円)の宿

泊料金を打ち出す施設が増えている。白浜の最高級ホテル・Kでも、いまは2万円から宿泊できるようになった。低価格の宿泊料金は（心を一つにして頑張っても？）従業員の低賃金と、長時間で追い回される劣悪な労働条件に、先ずはね返ってきているのが現場の事実だ。複層したグローバル都市のなかにも生活環境の劣悪な「国内植民地」があるように、白浜もグローバルイズムの動向の影響をもろに食らう、その層の違った国内植民地の末端の「受益者」なのだ。（このアンバランスから起因したもろもろの歪の真の根の構造を生活の具体的事例でもって厳密に示すべきことが最も肝心なところだが、この主題はそこから脱皮していくことと共に今の私の力量では荷が重過ぎるので、今後の課題とさせていただくことをお許し願いたい。）

象徴としての介護保険の話に戻るが、1960年前後の白浜温泉の最盛期の頃に、若くして働きに来られた方々も歳をとってしまった。70代になってしまったのである。白浜町は、付近の市町村に比べて老人施設が多い。「おくにはどちらですか。」と、郷里から遠く離れた身寄りのいない一人暮らしの老人が多いのである。母子家庭、老人の生活保護も多く、仲居の仕事で爪に灯をともしような生活をしながら、「愛」を拾う余裕もなく貯蓄し、それを残したまま認知症になってしまった老婆たちもいる。

老後の心は静かで、安らかであろうか。白浜の老人施設には、親族の面会は殆んどないと聞く。

旅館・ホテルでの労働条件は厳しい。今日の最高級ホテル・Kでの、皿洗いのパートの時給は700円から800円だ。{指紋が消えるほど働くのだ。} 前述の25軒のホテル・旅館の労働者の内訳は、正社員は、男703人、女488人。パートは、男240人、女434人。派遣社員、男21人、女78人。合計1,964人である。正社員は男性が多いが、パート・派遣社員は女性の方が圧倒的に多い。白浜町の外国人登録者数は130人となっている。{街なかではフィリピンからの女性たちが目立つ。主な仕事は水商売や色々なショーへの出演が多いようだ。} 労働過程は厳しいが、生きることをやめるわけにはいかない。やめるわけにいかない以上、賃労働の支配に従属しながらも、お互いに親切で、丁寧で、快活であってほしいと思う。

雇用と被雇用、あるいは管理と被管理がもたらす苦痛やそこから派生する難問と、人格の善や悪が人間関係にもたらす苦痛や難問とは同じではないのだから。

私は、かつて温泉街の小学校で、教員暮らしを10年やっていた。現役時代もそうであったが、辞めたいまま振り返ると己の情けなさと、いい気さ加減をおもいしらされる。

記憶に残るひとつの例だが、従業員の宿舎のあるホテルは5軒である。宿舎で暮らす児童たちは、登校する時間帯も、下校してから眠るまでの時間帯も旅館・ホテルという仕事上の観光客の夕食や朝食の準備、後片付けなどで、親の時間帯とすれ違いになってしまう。親と会話する時間がもてないのである。その頃の児童たちは、今は30代、40代になっている。

小さな小さな心に口を噤んで、口に出せない内心の声を溜め込んで学校にやってくる。この社会に生まれてから、労働力が再生産されていく制度上、人間関係上の不公平な過程を、私は「繊細の精神」と「幾何学の精神」（パスカル）で、学校の教員という己の内面化された「植民

地主義」とともに、心の闇をかいまみることができた。{|一年間に姓が二度変わる児童もいた。[中上健次の「物語」の世界を越えた「現実」が白浜にもあるのだ、とそのとき感じたのを鮮明に覚えている。(中上はまだ生きていて、白浜は開発され過ぎてしまった、といていたが、月に一度は紀州・新宮に来ていた。)] 私にとっては、忘れ、眠らせてはいけない無二の体験である。|}

あらゆる地方は多少とも中央の国内植民地であろうが、このような白浜温泉の人的、物的動向の再生産を、「国内植民地」という搾取と差別を内包する認識概念で省察し再考すれば、現況の教育制度、医療と福祉の質、所得面での経済的格差の拡大と階層の固定化を確かにこの私の身体で体験してきたのだ。いまは国民国家の再生産過程から逃れる試行錯誤の思考実験をすることができるのである。まさに「道」を選ぶ余裕も、「自分」を選ぶ余裕もなく、各自の「能力」を得るための前提の不公平を問わない新しい「身分制度」の世襲のようだ。「自己責任論」を内面化し、自分自身にも自存できなくなって、貧困への怖れと憂いのみが残されていく。

白浜温泉街での一例だが、中国残留婦人の二世の六十歳になる男性で、日本語の日常会話が不便なまま、旅館に勤務されている。労働条件は、十七時から翌十一時までの夜間で、低賃金でもある。質素なアパートの一室を借りての一人暮らしで、まことに丁寧で真面目な方だ。私は、県の福祉保険課の要請もあって、月に二回拙宅に来てもらい、十三時から十五時まで日本語学習の援助をさせてもらっている。戦後は終わらず、取り返しのつかない日本国家の十五年に及ぶアジア隣国に対する植民地主義政策の後遺症は、厳然といまも露呈しているのだ。戦争状態は続いているのだとつくづく考えさせられた。戦後史の教訓の一つは、今後とも「民族」「国民」を志向するいかなる動向にも加担しないことだと私は思う。このような例は、全国のいたるところにあることだろう。

紀州・白浜からも、「脱植民地化」は、近代の歴史上、恣意的に作られてきた「国家」と「国民」の在り方と、世界の文明化と文化の総体を、私自身の実生活と生き方とともに問われ続ける難問なのである。

現実には秤と剣を手にする正義の女神は、つねに権力であり、法状態はあくまで国家状態として現れる。私たちの生活全体が資本制的「等価」性の網の目にまるごとのみこまれている。そこでは私たちのかけがえのない「個」もとりかえのきく員数でしかない。「等価」性に侵されて、「反・等価」性をとらえる能力を失いかけている。

「自己」、「主体」、「実存」である私たち。時には中心を求める求心力として、時には中心から拡がっていく遠心力として、現実をあらたにする不可視の未来への活動の質と形態の創造のヒント・徴候を私たちは探している。世界的な管理の網が覆い被さってくる窮屈ななかで、どのような共同性、どのような関係の連帯が可能だろうか、と。

負けても負けても負けてしまわない、権威主義のもとでの臆病で従順だが、当然の私たちの

日常の暮らし。

ブッシュが全世界に「おまえはアメリカにつくのか、テロにつくのか」と迫ったとき、弱者の「テロの側につく」と現場では、隣り近所をうかがわないと本心がしゃべれなくなってきた。本音あつての建前、建前あつての本音の生活である。

「人」の声を聴き、「明日」を語る余裕もなく、職場の同僚への悪口で資本への不平・不満の欲動を、その場その場で満たしていこうとする自縄自縛の飴と鞭の奴隷根性。喧嘩、カツアゲ、傷害、ドメスティック・バイオレンス、幼児虐待、家庭内暴力、自らの社会での歯車としての不自由で不平等な人間関係のはげぐちが出る。自分が尊重されないことに慣らされ、自己評価がとても低くなってしまっているのが、接してみると強張った表情からその人の生活と共に伝わってくる。

「人々を搾取すれば、アル中や麻薬、犯罪、自殺、などの深刻な社会的病が発生する」{ヨハン・ガルトウング} のである。まさに搾取と抑圧という構造的な暴力のなかにいる「私」を実感している。

自分のなかの植民地主義にあらためて気付くことで、自分が変わっていったなら、職場が少し変わるかもしれないのに。賃労働という日常社会の合法的な暴力と作られた無知に阻止されてしまう。「あなたがいうこと、なすことはすべて、いずれ自分に帰ってくる。」{ヨハン・ガルトウング} ということであるのに。

## 「知識人」へ

「知」の力を願いながらも、出合った「知識人」の認識力の貧困な一例として、「権力は悪だ」と考えるのではなく、どのような権力なら正当化されるかと考えてみることにそれが「21世紀的な考え方の流儀」{加藤典洋・朝日新聞2002年9月9日夕刊}。どんな立場で、誰に向かってものを言っているのかと思う。このような言葉を目にして、「[権力技術]の拘束の力関係の配備を、痛いほど日々実感しているので」立腹しないパート労働者は私の周囲の現場にはいないだろう。国民と国家の予定調和を目差す認識の典型。認識理論と実生活の実践との悪しき混同。正当化される「権力」など、国家と資本から仕事現場、家族、生活に至るマクロ権力からミクロ権力まで、この世にはないのだ。仕方なく人間の現状の歴史の不可避性を我慢して権威主義に、スターリニズムに耐えて生きているだけだ。

せめて今後の状況について語るなら「グローバルな経済の権力と、それを政治的に支える国民国家との間の不均衡、ここにこそ闘争のための大きな空間が開けているのである。」{エレン・メイクシンズ・ウッド、『資本の帝国』・中山元訳} というぐらいのことは、知識人ならたとえ間違っていたとしても理論的実践として示唆すべきであると私は思う。

「生きることは反ベシニズムだ。だから私たちは、すべてがダメになりうる、たしかなものはない<予定調和>は幻だ、という平明な真理になかなかなじむことができないのだ。オ

プティズムとく予定調和 >が終わるところから認識は始まる。」{小山俊一} 私の好きな言葉である。

仕事にありつけて働けるのは、国家や企業のお陰と思っている国民の「生」から、自分自身の個の「生」をとり戻すこと。

日々の毎日の無意識の暮らしを、自分の「ちから」として積極的に自覚すること。奴隷の「生命力」をひとつひとつ取り戻していく、良心的な、幾つもの層にまたがる複数の系列の規則性を揺るがす「知」の力。制度の偽造の利益関心を見抜きそこから離れた真っ当な認識力が、現場で働く私たちには「実行」の書としてほしい。

「国民は必然的に植民地主義者である」{西川長夫} という私たちの経験からの認識が、国民国家から空気のように「転移」してくる己の内面化された植民地主義の心性を照らし、やがて複雑多岐で重層的だが、国家の再生産装置に「逆転移」を惹起する気迫力をもつ的確で貴重な言葉だ。いままで感じてはいながらも、誰もが明確にいわなかった当然ともいえるこのことを、始めて言葉に顕現し摘出されたのだ。

ブルジョワ権力のイデオロギー的正当性は「国民」なくしては成り立たない。支配者は私たちに「国民」としての共同責任を要求する。「国民的なるもの」を方法意識として徹底させれば、「国民的立場」そのものを否定することによってその実現をめざす、ということまで行きつく筈である。そこまで行かないかぎり、権力の論理、「国民」が現実に存在するものとみなして成立する、ナショナル・インタレストとの間に区分を貫き通すことは不可能だ。その区分がおかされないために、「国民」否定の契機を含む、「国民は必然的に植民地主義者である」という現状の国民国家のなかで生きていながらの、「背理」の生活思想の覚悟は、現在の国民国家が様々な区分をおかし曖昧にしている、死臭の漂う国家の「完全犯罪」の再生産を遮る核心となる認識力であると私は考えている。

## これから

私の事実は、地球内の一地方の観光地で国家と資本に従属し、かつ世界の植民地主義にも加担しながら、己の執念とは矛盾するなかで、生活の糧を得ている最下層のパート労働者である。生きるとは現行を再生産していくことでもある。「国民は必然的に植民地主義者である」、二重拘束状態にあるのだ。{現在の世界で生活するとは、そういうことになるようシステム化され仕組まれている。}

いま私が理解したいのは、地域の構造が全世界の状況とどのような具体的な共犯関係にあり、また、どのような土着の努力や営みが不公平なグローバリズムを打破する可能性をもっているのか、いないのかを認識することである。

私の願いは、社会を構成する最も抑圧された不可視のような階層が、私を含めて資本と国家の「従属民」として存在することをやめるようになること。そのためにたえず世界への構想力をもって、唇を噛みしめるだけの私ひとりの些細な「直接行動」の「暴力」であっても実行し

ていける「人間力」を身につけていくこと。安易に自らの生を、自らの内面を「主体的」に制御、服従させて、微温的な自己組織化に甘んじて足れりとはしない。

この先、「魂の深さ」は逃げ去り、テクノロジーの発達のみが残っていくなかで、時間とともに「新自由主義」という政治的合理性の枠組内において再生産装置の情勢は推移していくことだろうが、社会的公平を成就する構造は、根本的な「国民国家」と「植民地主義」の願い下げなしには考えられない。まずは身近な目の前に存在し、前提とされているあらゆる組織の形の合理性の動きの形態に、懐疑をもつことにしたい。現状の合理性のもつ裂け目を探して、悦ばしき「認識」の「発明」をほんの少しずつでも自分なりに手がけてみるのだ。{具体的にいま考えているのは、遅まきながら知ったのであるが、八重山群島・竹富島の方たちの「売らない、汚さない、乱さない、壊さない、生かす」という約束ごとを作って島を守ってきた、島の人たちの精神と実践活動の歴史、現状のいくつかにこの身体で現地を体験し、触れてみたいと思っている。}

今ではないとき、ここではない場所、私ではない人間、「常識」の活動を一時的に停止し、知らない人間の世界経験に、「われわれが入り込むこの世界においては、存在と現れは一致している・・・存在は、区別なく、かつ区別された仕方でも、同時に単数かつ複数である・・・人々がこの惑星に住んでいる複数性が地球の法則なのである。」{ジャン＝リュック・ナンシー}ということに一步だけでも近づいてみたい。いま、私たちは「夢の通り道」のどのあたりにいるのだろうか。人間的・自然的の真の活動の「共同体」は、もう通り過ぎて行ってしまったのだろうか。それとも、未だ最も古い人間と最も新しい人間とが親しく生きていける、人間と人間たちの存在の、心静かに安らぐその固有の生、その固有の享受の「大地」と「精神」は、なお発見されていないのだろう、と考え続けている。

## 参考資料

西川長夫 『<新>植民地主義論』・平凡社、2006年

西川長夫 『フランスの解体?』・人文書院、1999年

ルイ・アルチュセール 『再生産について』・西川長夫他訳、平凡社、2005年

Michael Hechter, *Internal Colonialism*; University of California Press 1975年

『白浜町誌』

『白浜旅館組合資料』

ヨハン・ガルトゥング 『構造的暴力と平和』・高柳、塩屋、酒井訳、中央大学出版部、1991年、(まえがき)

エレン・メイクシンズ・ウッド 『資本の帝国』・中山元訳、紀伊国屋書店、2004年、268頁

ガヤトリC・スピヴァク 『サバルタンは語るができるか』、上村忠男訳、みすず書房、1998年

きだ みのる 『日本文化の根底に潜むもの』・講談社、1956年

倉田昌紀編著 『私家版・敬愛する人からの手紙Ⅰ～小山俊一書簡～』、1989年

ヴァルター・ベンヤミン 『暴力批判論』、野村修訳、晶文社、1969年、33頁

ジャン＝リュック・ナンシー 『複数にして単数の存在』、加藤恵介訳、松籟社、2005年、78,120頁

上勢頭 亨 『竹富島誌』・法政大学出版局、1979年

- 。1929年（昭和4）天皇の行幸
- 。1964年（昭和39）東京オリンピック
- 。1970年（昭和45）大阪万国博覧会
- 。1973年（昭和48）オイルショック（石油危機）

表1 1935年（昭和10）  
旅館数と収容力

湯崎温泉	十三軒	一、二〇〇名
白浜温泉	二〇軒	一、四七〇名
東白浜温泉	一〇軒	四〇〇名
大浦温泉	二軒	七〇名
古賀温泉	三軒	一一〇名
椿温泉	二軒	
合計	五〇軒	三、二五〇名

表2 1960年（昭35）  
旅館数と収容力

白浜温泉	二二軒	二、五七〇名
湯崎温泉	二二軒	一、七七〇名
東白浜温泉	八軒	一、二〇〇名
古賀浦温泉	一軒	四七〇名
藤島温泉	一軒	一一〇名
椿温泉	五軒	四六〇名
合計	五八軒	六、五九〇名

宿泊客100万人を突破する。

表3 1954年（昭29）

白浜に関して  
—お客様からのアンケート—

宿泊施設	五二	良い
旅館のサービス	四三	普通
みやげ店	五四	四八
料理飲食店	三三	四三
観光バス	五七	三五
白浜全体	四五	三六

悪い  
〇七  
%  
一九五五年より転載

表4 1968年（昭43）  
旅館数と収容力

白浜温泉	二五軒	四、一五〇名
湯崎温泉	三〇軒	五、五〇〇名
東白浜温泉	五軒	二、二〇〇名
古賀浦温泉	四軒	一、七〇〇名
藤島温泉	一軒	一五〇名
椿温泉	不明	不明
計	六五軒	一三、七〇〇名

・宿泊人数1519（千人）

表5 1978年（昭53）  
旅館数と収容力

白浜温泉	一六軒	三、七〇〇名
湯崎温泉	一五軒	三、九八〇名
東白浜温泉	三軒	一、九五〇名
古賀浦温泉	一軒	七〇〇名
藤島温泉	一軒	七〇名
椿温泉	六軒	九二〇名
計	四二軒	一、三二〇名

・宿泊人数1552（千人）

◎ 白浜温泉の各社の寮・保養所は、最高時115軒。  
◎ 「表」にある白浜、湯崎、東白浜、古賀浦、藤島、椿の各温泉を合わせて、「白浜温泉」と名付けて現在では呼んでいる。